緑蔭図書紹介

関係的存在といわれる人間へのまなざし

―『人間関係―かかわりあい・育ちあい』を読む―

西脇二葉

「人間は関係的存在である」

物質的な豊かさと精神的な豊かさは比例すると信じて、われわれ日本人は今日の技術の発達を遂げてきました。その結果、健康でありさえすれば衣食住どの面においても、誰の助けも得ずに生きていくことができるようになりました。効率的で衛生的で快適な生活環境の中で、自由気ままに生きていくことの幸せを誰もが享受できるものと思ってきたのです。

しかしながら、昨今の日本では自殺者が後を絶ちません。利便性の享受を追求し続けた結果、多くの日本人は自己を失いかけているのではないでしょうか。

幼稚園や保育所の保育内容研究の領域「人間関係」のテキストとしてだけではなく、広く「人間関係論」あるいは「保育指導法」「保育方法論」、また保育を全体的にとらえるためのテキストとして編集された、畠中徳子、赤井美智子、吉川晴美、日吉佳代子、宮下美智代、春原由紀による『人間関係―かかわりあい・育ちあい―』（不昧堂出版　一九九六年

初版発行）には、人間の在りようを、人と、自己と、物とのかかわりから定義した松村康平の理論が紹介されています。

「自己、人、物とのかかわり」のとらえ方

松村は、人間の存在の仕方について、以下の基本原理を用いてとらえることができると言っています（本書P15より）。

1　「人間は、関係的存在である。」
2　人間は、自己や人や物とさまざまにかかわりながら、生活している。
3　自己や人や物のかかわり合う、その関係の仕方は内在、内接、接在、外接、外在の五つに分けて把握することができる。

この松村の理論を本書の中で赤井美智子はオー・ヘンリーの有名な物語『最後の一葉』を用いて次のように解説しています（本書P20～25を筆者要約）。

『最後の一葉』には、絵描きを志す病身の若い娘（ジョンジー）とそのルームメイト（スウ）、そして気難し屋で二人とは倦厭（けんえん）がちな関係であった同じアパートに住む絵描きの老人（ベアマン）が登場します。病身を憂い、自暴自棄になっているジョンジーが、ベアマンの渾身の力で描いた一枚の蔦（つた）の葉によって自己を取り戻し、生きる意欲をもつに至るという話です。

まず、「ジョンジーの自己」と、看病するスウとベアマンの「愛情あふれる二人の人間の働きかけ」、そして「蔦の葉」の三つの要素が、さまざまにかかわり合い、変化していく場面展開は、上記の1・2の原理に対応します。

散りゆく蔦の葉と自己の病状を一体化させてしまうような、蔦の葉とのかかわり方（自己の物へのかかわり方）は、内在的なかかわり方として把握することができます。

しかし、強く内在化していた一葉が二晩続きの強い雨と風に吹き飛ばされることもなく壁の上の蔦にしがみついていた事実にジョンジーは直面し、奇跡のように散らない一葉に何か大きな力の働きの現れを感じ始めます。

どんなに激しい嵐にあっても散らない最後の一葉に強靭な生命力を与えている大きな力の存在を実感させられたジョンジーは、(それと一体化させていた)自己の生存をも支えてくれる大きな力の実在も確信できるようになり、生きる意欲を取り戻せたということになるわけです。

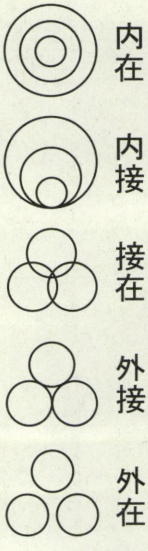
ひとたび若い命が生命力を回復し出すと、自己、人、物へのかかわり方の変化・発展は、次に示すように、非常にダイナミックに相互媒介的に展開します。

・自己関係—食欲がでてくる。身だしなみを整えようとする意欲がでてくる。

・対人関係—スウへの関心が快復し、スウの働く姿を見たがる。

・対物関係—長年の夢(ナポリ湾の絵を描くこと)を実現させようとする意欲の復活。手仕事を楽しむ(肩掛けを満足そうに編む)。

理論を図示化すると、以下のようになります。



本書の特色は、このように人間の存在の仕方と関係(かかわり方)のとらえ方についての原理を示し、事例を通してこの原理の理解ができるように工夫がなされている点にあります。

前書きには、「私たち人間はみな社会生活をしており、『人間関係』無くしては生きられず、より良い人間関係を築くことで、平和な世界を維持していくこ

とができると言えよう」とあり、平和な世界の構築は、人間関係の回復が基礎となることをうたっています。

本書を使った授業から

保育者を養成する立場にある私は、「保育内容研究A―子どもと環境・人間関係」という一年生の後期に開講する授業の教科書として、本書を使用しています。

本書を授業テキストとして選択した理由は、保育経験の浅い学生が関係学の理論を用いることによって、現場で起こるさまざまな問題を客観的かつ多面的にとらえられるようになってほしいと考えるからです。そして、この授業において強調して理解を促すところは、関係図の部分において、人と物とのかかわりの接点部分と同様に、どこにも重ならない自己の部分の存在の在りようも重要であるというところです。

理論を実践的に理解すべく、「誰かのことを思って物を作る」という課題を出します。キャンパスに隣接する井の頭公園で手に入るものを利用してプレゼントを作成し、受講仲間三人一組のグループを編成し、プレゼント交換をするというものです。

季節は、ちょうどクリスマスのころとなります。赤く染まった葉っぱや木切れを使った写真立てや、石ころで作った置き物、ネックレスなど実に多種多彩な贈り物が登場し、歓声と悲鳴（！）がそこかしこで上がります。

毎回授業後にリアクションペーパーをとりますが、この時は、プレゼントを贈った時と、贈られた時の二つの立場からの感想を書いてもらいます。

私の予想としては、「うれしかった！」「感動した！」「感激した！」という、平板な感情表現が連なるものと思っていたのですが、意外にも、細やかな心理描写、それも自己に向けられた内省的な言葉でつづられているものが多いことに驚かされました。

思わず、私が吹き出してしまったものを一つ紹介しましょう。小枝を数字に見立てたカレンダーを作ってきたこの学生は、クリスマスツリーを贈られることになりました。以下は、彼女の感想を原文のまま引用します。

> **・贈った時・**——申し訳なさすぎだった。すぐ捨ててねと言って渡したけど、「大事に使うよ」と言われ、心苦しくなった。○○ちゃんは優しいから、本気でこのぼろいカレンダー飾ってしまうように思う……。情けなくてマジ泣きがはいった。
>
> **・贈られた時・**——マズっっっイと思った。恥ずかしい……。泣きたくなった。

誰もが大作と評価するカレンダーを、得意満面に持参して臨んだものの、自分の予想をはるかに上回る贈り物を目にした彼女の心境の落差を想像し、私は思わず笑ってしまったのです。

ここで注目したいのは、贈る時も贈られる時も、自己の内省的感情が先にたっているという事実です。自分の作品に酔いしれるということは、すなわち、贈られる人もさぞ喜んでくれるだろうと勝手に思い込むことです。

このような「贈る相手の思い」と「自己」と「作品」が内在化している状況が、人とのかかわり、ほかの作品との比較において、自分の作品を客観視する機会となったこと。そして、自己をみつめた結果、「友人」と「作品」と「自己」とが接在的かかわりになるという関係性の発展がみられるということです。

リアクションペーパーをもとに、こうした理論の解説を重ねることで、人間関係の問題を解くカギは、人間同士のかかわりだけでなく、実は物とのかかわりも大きな要素であることを、学生は認識していきます。

そうして、「自分で作ったものと誰が作ったかわかる物」に囲まれた生活と、「誰が作ったかわからないもの、自分は何も作らずただ消費するだけ」の生活との違いに思いが至る時、学生は実に神妙な顔つきをします。

物を通して、人の心と自己の思いを知る。作り手の心と使うものの心が接在共存の関係であることを、実に忘れやすい状況の中で私たちは生きています。それは、人の思いに触れる機会をなくすことだけでなく、自分自身の思い、すなわち自己を見いだす機会もなくしているということでしょう。

物の実相・人間の実相

物を作るだけでなく、その物を通して人とかかわること。本書をもとにした授業を通して、私が気づかされたのは、物の実相をとらえることは、明るく、豊かな気持ちになるということです。

先ほど紹介した授業のリアクションペーパーも、友人の新たな一面や、自分自身の一面を見いだした楽しさやうれしさをつづったものが多くを占めています。

物作り大国日本と称されるように、日本人は、丹念に身の回りの物を作りながら、自分たちの生活を営んできました。それだからこそ、今日の利便性の高い生活様式がもたらされたことは、世界の中でもとりわけ日本人にとっては大きな精神的打撃となっているのではないでしょうか。

物とのかかわりにおける危機状態が多くの日本人の自己を見失わせ、自殺者の増加を招いている。このように考えるのは、想像に過ぎたことでしょうか。

いかなる状況下にあっても、明るい希望をもって生きていくこと。人間が生きる原理を解き明かすきっかけを、多くの人に見出してほしい。そのような期待をもって、本書をここに紹介させていただきました。

（立教女学院短期大学専任講師）